

# たどんの與太さん

竹久夢二

青空文庫



「なんだってお寺の坊さんは、ぼくに與太郎よたろうなんて名前をつけてくれたんだろう」

と、與太郎は考えました。

「餛あめのなかから與太さんが出たよ」街の餛屋の爺じいさんが、そう節をつけて歌いながら大きなナイフで餛の棒を切ると、なかから、いくらでも與太郎の顔が出てくるのであります。これには與太郎も困りました。

「よんべ、よこちよの、よたろうは」

そういって、八百屋の小僧まで、與太郎が、八百屋へ大根だの芋だのを買いにゆくと、からかいました。

「あの坊さんは、あれでエライお方なんだよ。あんなエライお方が、名づけ親なんだから、お前は、きつと今にエラクなりますよ」

與太郎のお母さんは、いつもそういいました。加藤かとうきよまさ清正は加藤清正らしい顔をしているし、ナポレオンはナポレオンらしい顔をしていて、與太郎よたろうの顔も與太郎らしいだろうかと、與太郎は考えるのでした。けれど、餼あめのなかから出てくる顔は、どうもよくないや。けれど餼あめのなかから大そうエライ人が生まれるのかも知れない。キリスト様は、馬小屋のなかからお生れなすつたし、ナスカヤ姫は、紅茸べにだけから出て来たからな。與太郎は考えるのでした。

「マリヤとグレコは、山へ茸狩にゆきました」

與太郎は妹のお才さいに、デンマルクのお伽とぎばなし噺をよんできかせました。

「マリヤとグレコは、だんだん山の奥の方へはいつてゆきました。するとそれはそれは綺麗きれいな紅茸がどつきり生えていました。——綺麗だなあ。グレコが言いました。——いけませんよ、それは毒茸ですから。マリヤが言いました。——だって綺麗だから好いいよ。——いくら綺麗でも毒なものはいけません。これはとると死んでしまいますよ。マリヤが何と言つても、グレコは紅茸をとりました。

——わたしはデンマルクの第二王女です。わたしは姉の女王のために、この山奥へ流されたのです。可愛かあい親切的な坊っちゃん、

あたしの王様になつて下さいね。紅茸の王女は、そう言つてグレコの手をとつて、森の御殿へつれてゆきました。

與太郎は、あの話を思おも出いだしました。どんな物をでも可愛がつてやろう、そしてどんな物とでも話をして、仲よくしようとそう考えました。

街を歩いてても、電車のなかでも、もつとみんな仲よく話そうと考えました。そこで妹のお才と二人で街へ出かけてゆきました。

まず酒屋のブル犬はなしに話かけました。

「ブルさんこんにち今日は、好いいお天気ですね」

與太郎がそう言つと、ブル犬は驚いて

「ウーウー」と吠ほえましたから、お才がなき出しました。

與太郎はお才をつれて電車通どおりの方へゆきますと、向うから、黒い毛皮のコートを着た奥さんがくるのを見つけました。與太郎は奥さんにお辞儀を一つして、

「おくさん、たいそう寒い風がふきますわね。おくさんはたいそう重そうな包を持っておいでですね。ぼくが、すこし持ってあげましょうか」

そういうと、奥さんは白い顔のなかで、黒い眼めを三角にしていきました。

「まあ、いやな子だよ。知らない人に物をいうなんて、きつと乞こ食じきの子だね、お前さんは」

そういつて、ずんずんいつてしまいました。

こんどは、鼻の頭の赤い肥ふとった洋服の旦那だんなが、坂の方から酔っ  
ぱらつて下りて来ました。與太郎よたろうは旦那だんなの前へいつて、

「旦那は酔っていますね。」

そういうと、今までにここにこしていた旦那は、急にきつい顔に  
なつて、

「やい孤兒院！ 酔つたつて余計なお世話だい。お世辞をいつた  
つて一文だつてやりやしないぞ。ぐずぐずしていると、交番の巡  
査にふんじばらせるぞ」

酔っぱらいの旦那はむくむく歩いてゆきました。

與太郎は、なんだか悲しくなりました。炭屋の子だからいけな  
いのだろうか。與太郎という名が顔に出ているから人が馬鹿ばかにす



るのだろうか。與太郎は、菓子屋の飾窓のガラスに自分の顔をうつして見ました。自分の着ている服は、すこしばかり古くなつて  
 いるだけで、街を歩くほかの子供たちと、別にかわつた所はありませんでした。與太郎は、ふと飾窓のなかに赤い紅茸べにだけのような  
 お菓子があるのに気がつきました。

「紅茸だ！ 紅茸だ！ あれをとろうよ」

與太郎がそういつているのを、菓子屋の番頭が聞きつけて、與  
 太郎の頭を一つなぐりつけました。與太郎とお才さいは、なきながら  
 家うちの方へ歩きました。質屋の横町を曲ろうとすると、いきなり真ま  
 黒くろいものにぶつかつて、與太郎は泥溝どぶのわきへはね飛ばされま  
 した。起きあがつて見ると、それは名づけ親の坊さんでありまし

た。

「坊さま、ぼくは飴あめのなかから生れたんですか」

與太郎がきいたけれど、坊さんはもう横町を曲つて、電車道の方へいつてしまいました。

「おまえは、たどんのなかから生れたのよ」

どこからか、そういう声がしました。それは質屋の小僧が、窓からいったのですけれど、與太郎は気がつきませんでしたから、やはり坊さんが、いったのだらうと思ひました。

それから與太郎は、たどんと仲よくして、もう外の物と話すことをやめました。そしていまに、たどんのなかからデンマルクの第三の王女が出てきて與太郎を森の御殿へつれていつて下さる

と、毎日考えるのでした。



# 青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年12月

入力：noir

校正：noriko saito

2006年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# たどんの與太さん

竹久夢二

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>